

鳥海登山から学んだこと

二年 讃岐 勝（昭和六十年）

全員が頂上にたどりついた学年のPTA行事、鳥海登山。ところが、これにはいろいろと問題があったのです。

一つは自分自身のことです。

僕は、五月の初めに盲腸の手術をして、それをこじらせてしまい二ヶ月近くも入院し体力的に無理かもしれないなかつたのです。もし途中で具合が悪くなったら、みんなに迷惑をかけるんじゃないかという不安があつて、なかなか行くとは言い出せませんでした。

その僕が、「行つてみよう。」という気持ちになつたのは、クラスメートが先生に、「勝も行かねば、登つてもおもしろくねえのー。」と言つていたと、先生から聞いたからでした。保育園からずつと一緒の十二人で、冗談ぐらいしか言わないと思つていた友達が、「友達つていいなあ。」と感じたのはこの時が初めてです。

二つ目は、みんなが自分の家の父兄が行かなくても誰かの家の父兄が引率してくれるだろうという気持ちになつて、それぞれの家で「来るな。」と言つたために、誰からも引率してもらえない状態、つまりPTA行事でなくなりそうな状態になつたことです。

誰かがやつてくれるだろうという気持ちはいろいろな時にできます。掃除の時でも、昼休みが終わつてボールを片づける時でも、教室の床がチョークで汚れている時でも、きつと誰かが……という気持ちになります。

そしてそういう時、今までは先生から注意されたり、当番

にやらせたりして誰かがやつてきたのです。ところが今回は本当に誰もしてくれないというおかしな状態になってしまいました。

クラスで話し合つてみたところ、引率してくれるはずだった父兄にも家で、「来るな。」と、言つていたことがわかりました。そして自分のかつこ悪さや恥ずかしさだけでその計画がつぶれかけたことを、みんな反省し合つたのでした。

先輩に山に登るのは苦しいぞと言われていたので、初めは少し緊張しました。しかし、実際苦しみながらも、「ごくろうさま。」「こんにちは。」と声を出すと、ふつと自分の気持ちが楽になるし、すれ違う時に言つてもらうと、はげみになることを知つたのです。いつもは照れくさいけど、山では自分から声が出る。それだけではありません。やつと飲んだ雪どけ水の冷たさ、友人から分けてもらつて飲む一杯の水のおいしさ、やつと頂上にたどりついて、十二人が新山の頂に石を積み上げたときの気持……。

僕は、これからの人生で、何のためにこんなことをしなければならぬかと思ひながら苦しまなければならぬことがたくさんあると思ひます。そんな時、自分が苦しいと思つた時は、みんなも苦しかつた。自分は一人ぼっちだと思つても、支えてくれる友達がいた。自分から声を出せば必ず返つてくる声があつた。そして何より、目標に到達し、乗り越えられた時の満足感。

飛鳥から遠くに見える鳥海山を見るたびに「やつたんだなあ。登つたんだなあ。」という気持ちが僕の頭の中をかすめ、がんばつて行こうと思ひるだろうと思ひます。